

文献紹介

新潟市歴史博物館 編

『蒲原平野の20世紀—水と土の近代—』

新潟市歴史博物館 2009年7月 95頁 800円

本書は、新潟市歴史博物館（通称 みなとびあ）で2009年7月18日～8月30日を会期として開催された企画展「蒲原平野の20世紀—水と土の近代—」の展示図録である。近代事象が歴史地理学の研究対象に包摂されてから久しく、また近年、研究の一段の深化がみられるとはいえ、まだまだ地域博物館で近代事象を正面から取り扱うことは少なからう。そういう意味で、素直にこの企画展を着想され、実現された関係諸氏に敬意を表したい。

展示図録のような小冊を、本欄で紹介するに値するか悩んだものの、展示を含めて歴史地理学的視点を多分に含み出色の出来である点から本欄への投稿を決意した。恐らくサーキュレーションの低い刊行物でもあろう。潤沢ならざる自治体博物館の運営費に対し幾ばくかの貢献ができれば、ご寛恕頂きたい。

さて、本書の構成であるが、以下の通り7章+ α となっている。

謝辞

ごあいさつ

凡例

本篇

プロローグ：19世紀までの蒲原平野

第1章 機械排水の導入と耕地整理—地図にない湖の時代—

第2章 回転式脱穀機の開発と普及

第3章 蒲原平野の土地改良事業の背景

第4章 耕地整理の先進地—白根郷と新津郷の土地改良事業—

第5章 食糧増産と都市化—亀田郷と栗ノ木・親松排水機場—

第6章 農政の転換と蒲原平野—鎧潟（西蒲原）・福島潟（北蒲原）の干拓計画—

第7章 機械化農業の先進地域—脱穀機王国新潟—

エピローグ：米あまりの時代へ

農業専門用語・略語の用語解説

展示資料

参考文献

以上、全143点の展示品に対して、当時の地形図や写真を多用しながら解説をしているほかに、目次上は明示されていないものの、11編のコラムが付されている。

「蒲原平野」の語は、あまり一般的な用語ではあるまい。試みに角川の地名辞典（CD-ROM版）で「蒲原平野」を検索すると「新潟平野」へ誘導される。この点、凡例で「『蒲原平野』は国土地理院作成の地形図では用いられていないが、新潟市域の地理的特徴を考える上で重要な概念であるため用いた」と、概念的な用語であることを認めつつ、使用していることを注意書きしている。

わざわざ、地形図中の註記までを引き合いに解説をしているところからして、極めて地理的な発想によって企画展示が成り立っていることが推察されよう。このことは、展示室の入口部分に、1911（明治44）年測図の1/5万図を集成し、拡大したものをフロア展示していたことでもわかる。近年のこの手の展示のお約束通り、図上に乗って眺めることが出来るようになっていて、評者が訪れた際も何人かの見学者が図上で食い入るように見入っていた。

「蒲原平野」は、信濃川・阿賀野川とその支流群によって形成された水はけの悪い低湿地で、享保5（1720）年の紫雲寺潟干拓から戦後の福島潟まで、潟の排水による農地開発が続いた地域である。

プロローグは、19世紀までに新田開発などにより耕地化されてきた経緯を「曾根」・「興野」などの新田地名や、地形分類図などをもとに概観し、水害の多発、農民の階層分化など、1918（大正7）年の米騒動までを解説し、メインテーマである「20世紀」の蒲原平野が抱えていた諸問題への関心を引きつける位置づけとなっている。一般的に農業の近代化は、塩水選、正条植、牛馬耕の導入

などをもって説明されるが、蒲原平野の場合、低湿な土地条件から耕地整理や畜耕の導入は、排水設備の整備を待たねば実現不可能であった。

第1章では、明治末から20世紀初頭にかけての小規模な機械式排水機の導入によって「地図にない湖」が農地開発され、耕地整理事業が着手されていく様子を描き出している。引き続き、第3章・第4章、第5章では、河川改修による排水機能の強化、排水設備の大規模化、耕地整理の拡大を通観している。特に第5章では、乱立する排水機場と、無造作に築堤される囲堤、開発余地の減少や都市化など、新たに顕在化した問題点を提起している。さらには第6章で、前近代期から存在し、20世紀前半を通じて強化されてきた、上郷一下郷といった地域間や、地主一小作といった階層間の(感情的なものを含む)対立関係が、食糧増産という国家の至上命題のもとで、半ば強制的に解消されていく様子と、この至上命題が、1970年代以降には、「米あまり」による減反政策の導入により崩壊していったことが述べられる。

排水設備の整備が、湿田の乾田化をもたらし、耕地の大型化・規格化に貢献すると連動して、農作業の省力化が図られることとなる。第2章では、田圃の外で使用される回転式脱穀機を2006(平成18)年度の「手回し機械の世界」展を振り返りながら紹介し、第7章では、田圃内で使用される耕耘機、トラクター、刈り取り機、コンバインなどが、県内メーカーによって次々と開発・普及していく様子を、当時のパンフレットや、販促用ノベルティグッズ、実機によって示している。浅薄ながら、図録を手にして展示を見る前にパラパラと目次を眺めていた時には、第2章が農地外で行われる行為を解説しているため、農地開発や農地内で使用される農業機械について語る他章との関連性が理解できなかった。しかしながら、実機展示を見て、この点は非常に得心がいった。稲刈りおよび結束作業を機械化したバインダー(結束機)、自動脱穀機に自走機能を付けたハーベスター、さらにバインダーと自動脱穀機を合した自脱型コンバインが普及する1960年代に至るまで、機械的な作動原理は一貫して「回転式脱穀機」に由来している。無理を承知で強引な表現をすれば、大正期に普及した据置型の自動脱穀機にキャタピラを履かせ、自走式に仕立て上げたものが

ハーベスターであり、両者を並べてみると、チェーンによって駆動する脱穀部が似通っていることがよく分かり、在来技術が昇華していく過程を判りやすく展示していた。

このような技術的な蓄積もあり、「蒲原平野」は機械化農業の先進地域へと成長し、労働余力が発生することになった。このことは、減反政策と相俟って、農外就業を行う兼業農家を多数発生させたことは周知の事実だが、エピソードではもうひとつ、別の観点から減反政策に対する地域の対応を紹介している。それは、栽培される水稻品種の変化である。食糧増産政策時代は、台風などによる倒伏被害を避けるため越路早稲、ホウネンワセなど早稲種が奨励され、またレイメイ、フジミノリなど多収量種が積極的に栽培された。これが、減反政策時代になると、従来いもち病に弱く、倒伏しやすいと忌避されていたコシヒカリが、一転して食味がよいことから選択されるようになり、量から質への転換が図られていく様子が1960年から5年ごとの市町村別作付品種の変遷表で説明されている。

以上、展示図録という性質上、膨大な資料群を「ギュッと」絞り込んだエッセンスで構成されている刊行物であるだけに、それを更に程よくまとめて紹介することはなかなか難しい。十分な紹介に至っていないのは評者の責である。冒頭でも述べたが、本書および展示は、極めて歴史地理学的な視点を基に構成されている。そこに通底しているのは、“水”を掻き、“土”を盛り、「水路や農道で直線的に区画された乾田が広がる田園風景が」が、「20世紀になってからようやく作り上げられた景観であることも忘れ¹⁾」てはならないとの強い思いである。景観とその変化に対する強い畏敬の念は、我々歴史地理学徒と共有できよう。

本企画展は、新潟市で開かれている「水と土の芸術祭(会期:2009年7月18日~12月27日)」を構成する一企画として開催された経緯を有する。そのためであろうか、7~8月という、稲作農家にとっては忙しかろう農繁期に開催されていることは何とも惜しい。現在営農されている農家の方々にとっては、リアルタイムに経験されてきたであろう直近の過去が展示により物語られている。彼らにこそ、展示を見て貰いたいと思うのは評者のみであろうか? 評者は、所用で新潟市内に出張を

していたため、ちょうど初日に本企画展を目にすることが出来たが、偶然の好運に助けられたに過ぎない。このような良質な展示について、学会としてもより積極的に広報活動をして頂きたいことを付記して本評を結ぶ。

なお、企画展自体は既に会期を終了しているため見学することは叶わないが、本図録は未だ残部があり、入手可能である。詳細は新潟市立歴史博

物館のHPを参照されたい。本冊価格に+100円の送料負担で通信販売をしているとのことである。

(天野宏司)

〔注〕

- 1) 新潟市立歴史博物館HP, 「蒲原平野の20世紀—水と土の近代— 開催趣旨」(http://www.nchm.jp/contents02_gyoji/02_kikaku_200902_top.html, 2009年8月28日閲覧)